

自然体験のすすめ

～自分で直接に体験することで子どもたちはひとまわり大きくなる。



少し前に「モノより思い出」という宣伝文句のテレビコマーシャルがありました。子どもを車に乗せて自然の中に出かけて、楽しい休日を過ごす親子。車が必要かどうかはさておき、親をはじめ大人が子どもに与えられるものとは？・・・おもちゃ、自転車、ゲーム機、お小遣い・・・さまざまありますが、それら「モノ」と違って形がなく、目には見えず、すぐには効果が現れず、準備が大変で、それでも子どもたちに与えたい大切なもの・・・それが「体験」ではないでしょうか。

汗を流す、作る、傷つく、褒められる、^{ケガ}怪我をする、我慢する、やり遂げる、けんかをする・・・テレビやゲームの中の出来事ではない直接の体験が、失敗も成功も含めて子どもたちの心の糧になることでしょう。

夏休みを目前に控え、この季節ならではの自然体験活動に注目してみます。

野外教育としての自然体験活動

自然体験活動とは、自然の中で、自然を活用して行われる各種の活動です。例えばキャンプ、ハイキング、スキー、カヌーといった野外活動、動植物や星の観察などの自然・環境学習活動、自然物を使った工作や自然の中での音楽会などの文化・芸術活動などを含んだ総合的な活動と言えます。さまざまな自然体験活動を取り扱う教育領域が「野外教育」であり、「自然の中で、組織的・計画的に、一定の教育目標を持って行われる自然体験活動の総称」と考えることができます。

それでは、多くの人が手軽に楽しむようになったアウトドアのレジャーとはどう違うのでしょうか？例えば「キャンプ」を例に考えてみましょう。家族や友達と行くキャンプは「とにかくの

んびりしよう」とか「たまには家族で / 友人で楽しく過ごそう」というあくまで自分の余暇を楽しむ気持ちが動機になります。その場合は出かける時間も帰る時間も、キャンプ場での過ごし方も自分たち次第です。もちろんその中でもいろいろな自然体験をすることは可能ですし、家族で登山などある程度の目的を持った野外活動もありますが、野外教育として行うキャンプは、組織的・計画的で、そのプログラムは一定の教育的なねらいを持つものであり、最大の違いは、家族や友人とは異なる集団の活動という点です。学校、教育委員会、青少年教育施設、民間団体などがそれぞれの理念や目的を持ち、野外教育の一環として自然体験活動の機会を提供しています。

自然体験は“心の経験”の玉手箱

自然体験活動を通して、子どもたちはさまざまなことを学ぶことができます。刃物や火の使い方など生活の技術、集団生活をするためのコミュニケーションや協調性、礼節ある態度、達成感による自信(自己肯定感)、自然の豊かさ美しさを感じる感受性など、そこで得られる経験、身に付けられる能力(スキル)は実に多様です。

不便さを体験し工夫することを学ぶ「野外生活体験」、

社会とのつながりを実感できる「職業体験」、自然や生命にふれて心が動かされる「感動体験」、郷土を愛する心を育む「伝統文化体験」、「他人との交流体験」・・・それぞれの自然体験活動のねらいによって、また、それを意識してプログラムを組むことによって、いろいろな要素が盛り込まれた豊かな体験のバリエーションが生まれます。

大人にできること

さまざまな自然体験の機会を準備し、提供することが、大人にできることです。時には大人にとっても新しいことを学ばなくてはならない場面があります。専門的な知識も必要なこともあります。ポイントは、大人たちが手をつなぎ、力をあ

わせること、そして大人たち自身が自然体験と共同作業を楽しむこと、学ぶこと・・・それがどうということなのか、4～5ページに紹介する2つの事例から、きっと見えてくるでしょう。